
M I C E

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M I C E

【Nコード】

N O 3 3 0 E

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

私はM I C E社西日本支店の営業課長兼宣伝モデル。消費者は私にこの私に魅了されてサプリを買う。

「美容も健康もたった3錠で手にはいる。スーパーサプリメント『M・I・C・E』の効果は、この私が保証します!」

「カット、カット!その営業スマイルじゃ駄目じゃないか。監督の駄目出しに、新人が引きつった笑顔を引っ込める。」

「うちのイメージに合うのは埼京さんしかないな。埼京さんに代えてくれ。」

社長直々の指名。

そうよ、新人なんかはこの大役は任せられない。私は自然な笑みとともに前へ進み出た。

カメラの前に立つ時、私、埼京裕美は女優になる。スタイル、顔立ちはもちろん、肌のハリや髪の手やまでカメラにさらす全てが魅せるためにある。私がカメラの前に立てば、それだけで宣伝になる。私は堂々と宣言する。

「『M・I・C・E』の効果は、この私が保証します!」

* * *

「埼京さん、お疲れ様です。」

『M・I・C・E』の通販進出のための番組撮影が終わった後、さっきの新人が声をかけた。私は鏡越しに彼女を見た。

ほんと、若さだけが取り柄って感じね。

たった10分の宣伝番組と言えども、撮影はスタジオで行われる。ここは番組出演者のための部屋。土壇場で降ろされた者が出入りする資格はない。

私は私が美しい私である事をじっくり確認するために鏡を見る。

新人はまだそこにいた。

「私に何か？」

「あ、あの…すいません。」

新人は慌てて頭を下げた後、遠慮がちに「あのう…」と声をかけた。全くはつきりしない娘だ。今度の新規採用では、はきはきと応答できる子を取るように会議で提案しよう。

「さっきの撮影のことはもういいわよ。」

私は靴からスーパースプリメントを取りだした。ストレスは美容と健康の敵だ。ストレスへの特効薬は、赤のサプリ。

「そ、それは…？」

「新しいサプリメントよ。」

この子ったら信じられない！新作のサプリも知らないなんて！ほんとにMICE社の社員かしら？

「新しい…新作ですか？でも、さっきの宣伝では…」

「ええ。まだ表には出してないわ。」

私はMICE社西日本支店の営業課長、且つ宣伝モデル。消費者はこの私に魅了されてサプリメントを買っていく。目に見える効果、会社の実績、それは則ちこの私。

「市場に出る製品はね、全て私が試した後で出回っているの。」

* * *

次の日、6：30きっかりに私は目を覚ました。

毎晩寝る前に疲れを取る緑のサプリを飲むので、すっきりと朝を迎えられる。

美容と健康に疲れは敵だ。

私は、紅茶に黄色の粉末サプリを溶かしながらテレビをつけた。MICE社が通販でサプリを売り出すことが話題になっているようだ。

私は紅茶をかき混ぜた。鮮やかな黄色がクルクル渦まいて、すつと溶けてゆく。

一段と明るくなったカップの中に、私の顔が映った。

ゆらり。

カップの中の顔が歪む。

思わず頬に手を当ててみる。

ぐにやり

頬の肉が手に貼りつくように、力なく垂れてきた。

嘘でしょ？

私は肉が落ちないように、掌をぎゅっと押し当てた。

落ちる、垂れる、流れてゆく。

まるで水のように、頬の肉は形を変えて指の隙間からこぼれ落ちる。

どろり、たらり

ティーカップの中に落ちてゆく。そこに映るのは、もう私ではなかった。

「そんなっ！私…の…」

口を開けば溶けた舌が溢れ出し、言葉が続かない。瞬きをすれば目玉が滑りだし、ティーカップの中の醜い顔が拡大される。

私の顔がっ！誰よりも美しい私の顔がっ！私の…私の…私のっ

…！

だんだん頭がぼんやりしてきた。意識が遠のく中で、私は脳みそが溶けているのだと悟った。

ティーカップの中に目玉が、ぼちゃん、ぼちゃんと落ちていく。視界に広がる霧を払うように、私はやみくもに腕を振り回した。

* * *

がたん

硬い感触と鈍い痛みが右手を襲い、私は腕を引っ込めた。目を開けると白い天井が広がっていた。

今のは、夢？

頬に手を当ててみると、いつもの弾力がかえってくる。

夢で良かった。いいえ、夢から覚めて良かった。どうしてあんな恐ろしい夢をみたのだろうか？もしかしたら、疲れているのかもしれない。昨日の撮影は、夜遅くまで続いた。新聞などでよく話題になるように、MICE社の発展は目覚ましい。美容と健康に疲れは敵だ。

私は、紅茶に黄色の粉末サプリを溶かしながらテレビをつけた。MICE社が通販でサプリを売り出すことが話題になっているようだ。私は紅茶をかき混ぜようとして、さっきの夢を思い出した。カップの中をのぞくのが、なんとなく躊躇われる。

まあ、いいわ。顔から洗いましょ。

* * *

三面鏡に映る私は、やはり綺麗な私だった。きめ細かい泡が、顔だけでなく気持ちまで洗ってくれたようで、フローラルの香りが心地良い。

私はリビングに戻り、紅茶のカップを持ち上げた。

『…シワが…』

不意にテレビから嫌な単語が聞こえ、思わず手を止めた。

シワ？

頬に手を当てて、テレビの音量を少し上げる。

『…株式会社カシワが食品部門から撤退し…』

大手企業でも食品業界で生き残るのは難しいらしい。そんなニュースなのに、ホツとした。頬の確かな弾力よりも、このニュースが美容と関係がない事にホツとした。

私は衰えない、シワやシミとは無縁だ、と今まで強く信じてきたものが、どうしてこうも不安にさせるのだろう。

大丈夫、さっきの夢で敏感になっているだけだわ。

この仕事に就いて長い。きっと、それが知らないうちにストレスになっているのだ。

私は赤いサプリメントを取り出して、3粒を口に含んだ。

しかし、水を用意していない。私は、サプリを舌で転がしながら水を求めてキッチンへ向かった。

その時、1つのカプセルが口の中で小さく弾けた。

苦い。カプセルの中身は、まるで生き物のように舌に絡みつき、感覚を麻痺させる。

苦い、苦い。

痺れが舌からこめかみへと伝染する。

私はたまらず、目の前の紅茶へ手を伸ばした。

ごくろり、ごくろり

息を止めて紅茶を流し込む。口から喉、胃へと痺れが走る。同時に吐気が込み上げて、私は手で口を押さえた。

ぐにゃり

顔の形が変わる。

どういう事？

急に頬が弾力を失い、引力に従うようにシワを刻みながら皮膚が垂れてくる。

「い、一体、どういう事なのっ!？」

気が付けば叫んでいた。その声は自分のものとは思えないほどかすれていた。

私は頬を押さえていた手を離して、さらに驚いた。一切の家事から守ってきた手が、徐々にひび割れ、かさつき、シミが現れたのだ。その、広げた掌の上に、パサリ、と灰色の塊が降ってくる。

髪の毛だ。

私は、背骨がミシミシと音をたてて丸まっていくのを感じながら、髪の毛の雪の中で倒れた。

胃から喉へと逆流する熱いものを感じたが、歯のない口はそれを止める事はできなかった。

私は、床に吐き出された血の海の中で、テレビが取り上げているMICE社の話題を聞いていた。

* * *

社内食堂のテラスで一服していると、

「社長」と後ろから声をかけられた。

「抗ストレス剤の開発期間をもう少し延ばして下さい。」

振り返ると、我が社の傘下に入った株式会社カシワの研究部の男がいた。

「ほう、君が申し出るという事は、何か安全上の問題が起きたのだね？」

「はい。服用によりサンプルA-025が死亡しました。」

男はそう言ってカルテを回した。

サンプルA-025…元々健康的で上質のサンプルだった。入社と

同時に実験体として使っていた彼女が、体調不良を訴えた事など一度もなかった。それどころか、年を重ねることに美しさを増してゆく様子は、全ての人間を魅了した。

まさに最強のサンプルではあったが、まあ、仕方ない。

「原因は？」

「まだ特定していませんが、副作用か他の薬との化学反応なのか、確認中です。」

研究部の男は、白衣のポケットに手を突っ込んだ。研究員と言うより医学生のように見える。

「この事は表に出すな。埼京裕美は海外の支店に転勤した事にでもしておけ。」

「…分かりました。」

男は一瞬躊躇った後、小さく頭を下げた。それで良い。

食品部門に手を伸ばしたカシワ社が失敗するのは目に見えていた。だからこそ、傘下に入れたのだ。

食品部門で赤字が出たら、MICE社の開発に携わる事。赤字が30億円以上に膨れあがったら、すぐに食品部門から撤退する事。

我ながら巧い取引きだ。

カシワ社が傘下に入る事で、また新たな事業が展開できる。

健康食品、ジェネリック医薬品、化粧品…誰もが求める『美容と健康』を売り物にする。将来的には病院やエステにも事業を広げるつもりだ。

私はテラスから下界を見下ろした。この本社を頂点に、子会社が点在しているのが分かる。

我が社はネズミの様に社員の数を殖やしてゆく。そして、それは立派な実験体になる。

実験体、そうマウスだ。

「…君は、我が社のネーミングをどう思うかね？」

白衣の男に訪ねる。

「MICE…ネズミですか？」

分かっているじゃないか。

口角が自然と上がる。

「今度、若い男性をターゲットにしたサプリメントを売り出したいんだが…どうだね？」

私は次のサンプルのネームプレートを素早く盗み見た。

* * * E N D

（後書き）

社員が実験台となる事で、安全確認とサプリの効果を宣伝をしているのですね。

こんな会社は嫌だ（汗）

埼京さんは急に老婆になって…実年齢が気になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0330e/>

M I C E

2010年11月20日03時14分発行